京女史口傳

昭和戦時の巻【その九】㉙

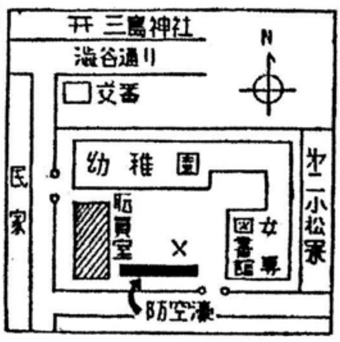
幼稚園でも被弾

松信校長　事態収拾に心労

昭和二十年一月十六日、その夜の空襲で京都幼稚園も被爆した。

爆弾は園舎から十ﾒｰﾄﾙ離れた防空壕の真横に落下した（注＝校庭の南端、今の藤棚付近）。二階建の園舎の壁は穴があき、窓ガラスは吹っ飛び太い柱はヘシ折れたが倒壊はしなかった。

昭和十五年京都府営繕課に設計を依頼して出来上がったのがこの幼稚園だ。当時、府は危険防止のため二階建の幼稚園を禁止していたが、初の試みとして営繕課が二階建を設計し安全と堅牢に重点をおいたものだ。



×印が落下地点。斜線の部分が倒壊した。小使部屋は職員室に南接している。

園舎は無事だったが別棟の職員室と小使部屋はあっけなく倒壊した。小使部屋には老小使とその娘の二人が住んでいた。二人は下敷きになった。

一花一枝、松崎おき両保母は爆撃と同時に危険を聞いてかけつけたが、女手では下敷きの二人を助け出すことは不可能だ。その上、真っ暗だ。「小使サーン!」と呼ぶと、折り重なった材木や瓦の下から「ハーイッ」とかすかに返事が聞えた。

付近の爆弾落下地点の民家から火災が起こった。火勢が強くなれば園舎も類焼のおそれがある。下敷きの二人をみすみす焼き殺すことになりかねない。一花保母は道路へとび出て救出に加勢を求めたが相手になってくれる人はいなかった。やっと、頼りになりそうな一人の中年の男を捕えた。

「生き埋めの二人を助けて下さいッ!」

と夢中で云うと、その男は

「わし一人ぢや……どうにもならんぢやろう……」

とためらって云った。あとでわかったのだが、彼は松原警察署の署長だった。そのうちに夜があけた。やっと下敷きの二人を助け出した。怪我はなかった。（注＝老小使はまもなく病死した。爆撃のショックだったらしい）

◇

三島神社という小さい神社がある。「安産」の神様だ。この神社を境にして渋谷通りは上馬町と下馬町とに大体わかれている。爆撃後、下馬町は猛火に包まれ、上馬町あやうしと思われた時、恰も炎をさえぎるかの如くに三島神社の屋根から水が噴き出し、それが霧のカーテンとなり、上馬町は延焼をまぬがれたという伝説がある。

「私はその霧のカーテンを確かに見た」

という狂信的な目撃者もいる。京都幼稚園がそのおかげで類焼を避け得たのだとすれば「ありがたや……」である。

◇

防空壕の真横の落下地点は地面に大穴があいていた。壕と落下地点は二ﾒｰﾄﾙも離れていない。だが壕は全く損傷を受けていなかった。長さ十ﾒｰﾄﾙ深さ一ﾒｰﾄﾙの木造の壕だが土くずれ一つしなかったというので一躍有名になり、その後、多数の見学者があり壕構築法のサンプルとなった。

◇

一花先生

松信校長

京都幼稚園は岩井栄之助氏（雅号鷲水）の経営だった。園長には松信定雄（女専、高女）校長が兼任していた。

当時、市内の幼稚園はすべて休園状態だったが京都幼稚園だけは続いていた。毎日午後四時まで幼児を預かり母親たちの職場挺身の一助となっていたので「銃後幼稚園」の別名があった。おヤツは勿論、母親たちの手間をはぶくために給食もやった。一花保母は中央市場へ買出しに行く重労働もやってのけた。

昭和十九年まではスクール・バスで園児の送り迎え（注＝一コース三十分で四コース）をしていたが、バスが舞鶴の軍需工場に徴発されてからは、一人一人園児の手をとっての送り迎えが一仕事だった。空襲が頻繁になっても、母親たちは

「どこで死んでも同じことです。子供が京都幼稚園で死ぬのなら悔いはありません」

といった信頼ぶり。

◇

被爆後、破損した園舎の補修に経済的負担がかさみ、岩井栄之助氏は朝倉暁瑞本願寺執行長（元女専、高女校長）に相談し、昭和二十年四月から女専、高女と合併することに決定した。とりあえず三月末まで仮園舎として第三校舎（テニスコート北側）を借り、ここで園児の卒業式を迎えることになった。

◇

松信定雄校長は明治四十五年東大哲学科卒、教育畑で要職を歴任昭和十九年女専、高女、商女、幼稚園の四つの校長に赴任した時、勤労動員、学校工場、学校農場の運営など問題が山積みされていた。同窓生の女子挺身隊編成の問題もあった。そして第三小松寮、幼稚園の被爆後の処理もあった。彼がこれらの問題を担って如何に心労があったか想像できる。

時まさに太平洋戦争末期。敵は本土決戦を挑んだ。米空軍参謀本部はB29爆撃機による都市無差別爆撃の構えをとった。国破れてなんの山河があろうか。祖国を護るために自ら死地に飛び込んで行くのが大和魂だ。戦陣訓は「死して悠久の大義に生きる」ことを説いた。

皆そう信じた。航空部隊の若者たちは敵艦に「体当り」を敢行し陸上部隊は敵陣深く「斬込み」をやった。祖国の興廃を命にかけた将兵の屍は累々として折り重っていた。われわれは味方の屍をふみ越えて進まねばならぬと信じた。

―戦局は極度に悪化しており、学校教育は戦争の正義を教え、殺敵の訓練をしなければならなかったから、校長の椅子にあった彼は内心おだやかではなかったろう（京女史口伝㉙編）―

松信校長は鉄カブトを背に各工場に出勤している女学生を激励して廻った。愛する教え子が馴れぬ労働に挺身しているのを見て「かわいそうに……」と胸一杯になりながらも、それを口にすることすらできなかった。教育勅語の〝忠孝の道〟を説き、勤労精神を強調するのが常だった。危機存亡の時にあって、あまったるい教育をしていられなかったのだ。それは、温情主義の彼が担わねばならぬ悲しき十字架であった。

◇

しかし、女学生たちは松信校長の温情を知っていた。二十二年に彼が退職（本願寺執行就任）したのちも、彼女たちは彼の徳をしのんで卒業記念に彼の額（写真）を講堂に掲げようと提案した程だ。「歴代校長の額を掲げるのならともかく、一校長だけの額を掲げるのは前例がない」という理由で実現は妨げられたようだ。

更に二十三年、彼は九州へ転出したが、京都駅に見送った同窓生在校生は恰も堰をきって流れ出た如くホームに殺倒した。当時は「入場券」の発売は中止されていた。駅員の制止もきかず乱入した訳である。あとで、責任者は駅長室で油をしぼられたと云い伝えられている。

これらは、松信校長の徳をしたうすさまじさだろう。【水戸】

この記事についてのご意見は氏名住所を明記してご投書ください。

（タイムス編集室）